マイ避難カード作成の手引き

ワークショップと実践

マイ避難カード作成ワークショップの
準備や開催、
その後の避難訓練などを説明します

ワークショップと実践の目的

- 住民一人ひとりが適切な避難行動を行うためには、個人・地域・行政が連携した取り組みを進めることが重要
- マイ避難カード作成ワークショップなどを行うことで、勉強会やまち歩き、意見交換を通じて、個人・地域に応じた適切な避難行動を理解し、自助・共助の意識を育むことができる
- 土砂災害警戒区域、浸水想定区域やその周辺に住む住民一人ひとりが「自分のいのちは自分で守る」という意識を持つとともに、土砂災害・水害時に適時適切な避難行動ができることを目指す

ワークショップと実践の流れ

ステップ1 準備と計画

1. 実施地域と対象者の選定
2. 支援制度・支援者の活用を検討
3. 実施計画
4. 地域住民への参加の呼びかけ
5. 物品の手配
6. マイ避難カードの様式の検討

ステップ2 ワークショップ

1. 勉強会
   - 土砂災害・水害、ハザードマップについて
   - 避難の必要性、避難のタイミングと避難行動
2. まち歩き
   - 自宅周辺や避難場所までの避難経路にある危険箇所などを確認
3. 防災マップづくり
   - まち歩きで確認した情報を参加住民同士で共有
4. マイ避難カード作成

ステップ3 避難訓練

マイ避難カードを活用した避難訓練

- 適時適切な避難ができるか検証
- 必要に応じてカードの記載内容を修正

ステップ4 出水期の実践と検証

出水期における住民の避難行動の実践と検証

- 台風・大雨時の住民の避難行動を検証
- 検証結果を踏まえ、地域での共助の取り組みなどを検討

ステップ 1 準備と計画

▶ ワークショップの運営者や支援する団体、市町職員で話し合い、ワークショップの進め方を検討する
▶ スムーズな運営ができるように、役割分担や実施スケジュール、準備について確認する

1. 実施地域と対象者の選定

対象地域の検討

▶ 小学校区、自治会、集落など、対象とする地域を検討する。対象とする地域が広くなる場合は、まち歩きをする際に地域を分けて行うなどの工夫をする

対象者の検討

▶ 住民全員、自主防災組織のメンバー、自治会役員、PTA、老人会など、対象者を検討する。地域住民だけでなく、地域内にある小中学校、高校、大学、社会福祉施設、事業者、社会福祉協議会などの関係する団体の参加も有効
▶ 主催者の運営や参加者の習熟を考慮し、参加者20～40名程度が望ましい

2. 支援制度・支援者の活用を検討 （※詳しくはP.33を参照）

支援制度の活用を検討

▶ 「ひょうご安全の日推進事業助成金」や「出前講座」など、県や市町の防災や自主防災組織にかかる支援制度の活用を検討する

支援者の活用を検討

▶ 県市町職員、専門家（学識者、気象台職員など）、ひょうご防災特別推進員や防災士、地域NPOなどによる支援を検討する。支援依頼の際は依頼内容を明確に（※講師やまち歩きサポート、計画支援や資料作成支援など）
▶ 支援依頼については、県や市町に相談してみるのもよい

3. 実施計画

実施内容と実施スケジュール

▶ 「ステップ2 ワークショップ」と「ステップ3 避難訓練」の開催日時・場所・実施内容を検討する
ワークショップ：日時、地域の実情を考慮し、1～2日程度で開催
開催場所：地域住民が集まりやすい公民館や集会所など

▶ ステップ4 は気象条件に左右されるが、出水期までに ステップ3 の避難訓練を終わらせておくのが望ましい
ワークショップ：日時、地域の実情を考慮し、1～2日程度で開催

運営者の役割分担

▶ 運営側の役割を決め、運営の体制を整える
▶ 下表を参考に、計画と準備の役割を分担して進める

役割
自治会長など地域の世話役との調整
講師や支援者、県市町職員との連絡調整
資料作成
物品、会場手配

4. 地域住民への参加の呼びかけ

- 掲示板、回覧板やチラシなどを活用して、参加の呼びかけを行う。地域内の各種団体（PTA、老人会、婦人会など）を通じて参加の呼びかけを行うのも効果的
- 多くの人が参加する地域行事とあわせてワークショップを実施したり、地域の防災訓練にマイ避難カードを活用した避難訓練を組み込むなどの工夫で、多くの参加者を集めることが可能

芦屋市「マイ避難カードワークショップ」チラシ

神戸市「避難マップづくりワークショップ」チラシ

5. 物品の手配

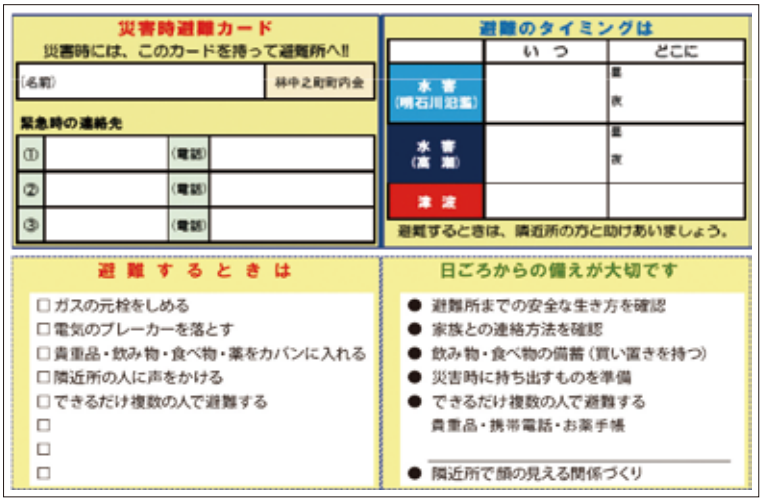
- ワークショップや避難訓練の実施に必要な物品をリストアップし、当日までに手配する
- 使用する物品については、「勉強会（P.21～）」「まち歩き（P.23～）」「防災マップづくり（P.27～）」の各項のリストを参考にする
- ハザードマップや白地図などの手配は、市町に相談する

6. マイ避難カードの様式の検討

- ▶ 兵庫県や市町の様式、市町ハザードマップに掲載の様式などを使用する
- ▶ 緊急連絡先や非常用持ち出し袋を追記するなど、災害の種類や地域、家庭などの状況にあわせて様式の変更を検討してもよい

＜様式例＞

カードタイプ（明石市）



- ▶ 避難時に携帯していると役立つ情報（緊急時の連絡先や避難する際のチェック事項）も一緒に記載できる
- ▶ 2つ折りで名刺サイズになり、財布や定期入れに入れて携帯できる

マップタイプ（神戸市）

- ▶ ハザードマップに「わが家の避難ルール」を記載できる記入枠がついており、避難場所までの避難ルートも一緒に記載できる
- ▶ 冷蔵庫などの目にとまる場所に掲示することを想定

マグネットタイプ（洲本市、新温泉町）

- ▶ 県の様式をマグネットシートに印刷
- ▶ 避難ルールを記載し、冷蔵庫や玄関などにそのまま貼りつけられる

ステップ 2 ワークショップ <標準的な例>

- 防災の専門家や市町職員による勉強会、まち歩きなどにより住民同士で情報共有を行いながら避難行動を検討する
- マップづくりやカード作成自体が目的ではなく、住民一人ひとりが避難の手順を考えて、決定するプロセスが重要

ワークショップの流れ

1

勉強会
（避難の基礎知識・ハザードマップ編）

30分

- テーマ例
  - ・ワークショップの目的
  - ・早期避難の重要性
  - ・気象災害の激甚化
  - ・ハザードマップについて
  - ・地域の災害リスク
- 専門家や市町職員が講師を担当

（詳細はP.21～）

→

2

まち歩き

60分

- グループ分け、役割分担
- まち歩きの方法、ポイントを説明
- グループでの作戦会議
- まち歩きを実施

（詳細はP.23～）

ワークショップ

【分割して実施する例】

- ワークショップに3時間を確保できない場合は、1と2 3 4 を2回に分けて実施するなどの工夫を

1日目（1時間）	2日目（2時間）		
1 勉強会 （避難の基礎知識・ハザードマップ編） 60分	2 まち歩き 60分	3 防災マップづくり 30分	4 マイ避難カード作成 30分

▶「自分のいのちは自分で守る」意識の徹底を図り、避難行動と結びつけることを意識してワークショップを進行する

3

防災マップづくり

30分

- ▶ まち歩きの結果をマップに記入し、グループ内で共有
- ▶ グループごとに意見を発表し、全員で共有
- ▶ 必要に応じて、専門家や市町職員がサポート

（詳細はP.27～）

1

勉強会
（避難行動編）

30分

- ▶ テーマ例
  - ・避難を判断する情報
  - ・避難のタイミングと避難行動
  - ・マイ避難カードの普及
- ▶ 専門家や市町職員が講師を担当
- ▶ 冒頭の勉強会と一度にまとめて最初に実施してもよい

（詳細はP.21～）

4

マイ避難カード作成

30分

1～3の内容を踏まえ、各自で「マイ避難カード」を作成

（詳細はP.29～）

全体 3時間

【まち歩きと防災マップづくりを事前に行う例】（P.35参照）

▶ 2まち歩き、3防災マップづくりを運営者が事前に行い、講義形式で参加者に伝える方法もある

ワークショップ当日まで

運営者や支援者(防災士など)が事前にまち歩きを行い、危険な箇所などを確認、記録し、マップや講義資料にまとめる

ワークショップ当日（100分）

1 勉強会（避難の基礎知識・ハザードマップ編）30分 → まち歩きの結果を説明 30分 → 1 勉強会（避難行動編）20分 → 4 マイ避難カード作成 20分

1 勉強会

マイ避難カード作成の趣旨や避難に必要な情報を理解するため、勉強会を行う

▶ 住民が勉強会の講師を担当できない場合は、専門家や県・市町職員などに講師を相談・依頼する。
実施地域に詳しくない講師を招聘する場合は、事前に地域の情報を講師に伝えておくとよい

▶ 下記の役割分担表を参考に、勉強会の役割を分担しておく

役割名	人数	内容
司会係	1名	勉強会の進行、挨拶のお願い、講師とのやり取りなど
運営係	1名～	受付や資料配付など、勉強会の運営をサポート
記録係	1名～	ビデオカメラやデジタルカメラ、レコーダーで記録

ポイント！

- はじめに、参加者に「なぜ避難が必要か」を理解してもらうことが最も重要。
マイ避難カード作成の趣旨やその後の講義、まち歩きの一層の理解につながる
  - ❶ワークショップの目的
  - ❷早期避難の重要性

- 近年、短時間で局地的に大雨が降るなど自然災害が激甚化していることを認識してもらう
- 近年の災害事例を示すことにより、自分の住む地域でも災害が起こり得ることを認識してもらう
  - ❸土砂災害・水害の特徴

- 住居の場所や構造、家族構成などによって、適切な避難行動が異なることを理解してもらう
  - ❹ハザードマップ
  - ❺地域の災害リスク

- 各自、避難を判断するための情報を確認してもらう
  - ❻避難を判断する情報
  - ❼避難のタイミングと避難行動

▶ 学識者による勉強会（太子町）

▶ 気象台職員による勉強会（三田市）

勉強会の内容

前半と後半を合わせて行ったり、地域に合わせた内容を取り入れたりしてもよい

	テーマ	概要	備考
前半	❶ワークショップの目的	▶ 避難の必要性について説明 ▶ マイ避難カードの趣旨について説明	
	❷早期避難の重要性	▶ 災害から身を守る早期避難の重要性 ▶ 正常性バイアスと多数派同調バイアス ▶ 早期避難をして助かった事例	
	❸土砂災害・水害の特徴	▶ 自然災害の激甚化 ▶ 土砂災害の種類（がけ崩れ、土石流、地すべり） ▶ 水害の種類（洪水、内水氾濫） ▶ 近年の災害事例の紹介	
	❹ハザードマップ	▶ ハザードマップとは? ▶ ハザードマップの入手方法 ▶ ハザードマップの見方	市町からハザードマップを入手
	❺地域の災害リスク	▶ ハザードマップを用いて、地域で起こる可能性のある災害を確認 ▶ 地域で起こった過去の災害（浸水履歴や過去の災害に詳しい人からのヒアリング内容を参考に）	
後半	❻避難を判断する情報	▶ 避難情報、防災気象情報（注意報、警報、危険度分布など）、水位情報、警戒レベルの説明 ▶ 情報の入手方法	P.5 ～ P.13の配布資料を活用
	❼避難のタイミングと避難行動	▶ 避難のタイミング ▶ 避難場所と避難経路 ▶ 避難の方法	P.5 ～ P.13の配布資料を活用
	❽マイ避難カードの普及	▶ 家族や地域への普及	

勉強会で使用する主な物品

物品名	必要数	手配先
パソコン、プロジェクター、スクリーン	各1台	運営者
地域のハザードマップ	参加者数	市町または WEB サイト （詳しくは巻末の情報の入手先を参照）
講義用資料	参加者数	P.5～13「マイ避難カードをつくる」 その他、県、市町、専門家などに相談

2 まち歩き

台風や大雨時の危険箇所や避難できる場所などを確認するため、グループに分かれ、まち歩きを行う

▶ ハザードマップだけでは分からない地域に潜む危険箇所を確認するため、自宅周辺や避難場所、その間の避難経路を歩く
▶ 近隣住民と一緒に歩くことで過去の災害や新たな危険箇所の気づきへとつなげる

まち歩きの流れ

1. グループ分け、役割分担

▶ 地域、班などの単位を中心に、近くの住民を6～10名程度のグループに分ける
▶ 40分～1時間で戻ってこられる程度の範囲でまち歩きのコースを設定
▶ 下表の役割分担例を参考に、グループで役割を決める

役割名	人数	内容
リーダー	1名	班のまとめ役
カメラ係	1名	まち歩きのチェックポイントをカメラで記録
メモ係	1名～	まち歩きでのチェックポイントをメモ
安全確認係	1名～	まち歩き中の安全（道の横断など）を確認
アドバイザー（支援者）	1名～	専門家、市町職員、防災士など まち歩きのポイントや地域の情報を参加者に伝える

2. まち歩きの方法、ポイントの説明（P.24参照）

▶ まち歩きで確認するべきポイントを参加者に伝える。想定される災害について重点的に確認する項目を決めておく

3. グループでの作戦会議

▶ グループごとに、白地図やハザードマップを見ながら、まち歩きで確認するポイントや、歩くルートなどを話し合う

4. グループでまち歩き

▶ グループごとにまち歩きに出かける。危険な場所や避難できる場所などを確認する。
チェックしたポイントは、カメラで記録し、用紙にメモをする
▶ 特に重要だと思われる箇所（P.24～参照）については、グループ全員で確認する

ポイント！

- 地域での浸水（内水氾濫）や、河川増水など、実際の避難時の状況をイメージしてもらう
- 避難場所の位置を確認し、避難場所までの経路をイメージしながら歩く
  また、夜（暗いとき）や逃げ遅れたときに避難できそうな場所も確認する
- 下表のチェックポイント（例）を確認しながら、まち歩きを行う
- 過去の土砂災害、水害や危険な箇所について話し合いながら歩くとよい
- 危険な場所などを写真で記録しておくと、グループ間で共有しやすい
- まち歩きのポイントを把握している専門家や市町職員、防災士などの支援があると
  スムーズにまち歩きを進められる

災害種別	危険な場所・安全な場所	チェックポイント（例）
土砂災害	危険な場所	土砂災害警戒区域（イエローゾーン）、 土砂災害特別警戒区域（レッドゾーン）
		がけ崩れのおそれのある場所、過去にがけ崩れのあった場所
		がけから水が湧きでている場所
		割れ目があるがけ
		土石流のおそれがある場所、過去に土石流のあった場所、範囲
		地すべりのおそれがある場所、過去に地すべりのあった場所、範囲
		斜面沿いにある道路
	安全な場所	土砂災害の指定緊急避難場所（小学校、中学校、公民館など）
		夜（暗いとき）や逃げ遅れたときに、一時避難できそうな建物
水害	危険な場所	ハザードマップの浸水想定区域
		過去の浸水範囲
		地域で早く浸水する箇所
		河川カーブの外側で堤防が低いところ
		土地が河川の通常の水位より低いところ（天井川）
		流木などが引っかかりやすく橋脚の間隔が狭い橋
		ガードパイプなどの柵がない水路、溝蓋のない側溝
		浸水すると段差が分かりにくくなる場所
		浸水時に通れなくなるおそれのある場所（アンダーパス、地下道など）
		フタが開くマンホール
		街灯のない暗い道
	安全な場所	洪水の指定緊急避難場所（小学校、中学校、公民館など）
		夜（暗いとき）や逃げ遅れたときに、一時避難できそうな建物
		夜（暗いとき）や逃げ遅れたときに、一時避難できそうな標高の 高いところにあるオープンスペース

まち歩きで使用する主な物品

物品名	必要数	手配先
白地図（まち歩き用） または、 地域のハザードマップ（まち歩き用） ※サイズはA3～A4程度が持ち歩きやすい	グループ数	市町またはWEBサイト （詳しくは巻末の情報の入手先を参照）
ペン、メモ用紙、バインダー	グループ数	運営者
カメラ（スマホのカメラも可）	グループ数	運営者

▶ 南あわじ市でのまち歩き

▶ 新温泉町でのまち歩き

ワークショップでまち歩きを行う時間がない場合

▶ ワークショップ当日までに、運営者や支援者で事前にまち歩きを行い、危険な箇所などを確認しておく

▶ まち歩きの結果は、写真をスライドにして参加者に伝える

神戸市の事例

- 依頼のあった地域で、まち歩きを通じた現地調査を事前に行い、危険な箇所や避難場所などを確認し、カメラで記録
- 現地調査の結果をスライドにまとめ、ハザードマップを見てもらいながら、地域の危険な場所や安全な場所を参加者に説明
- まち歩き結果を含めた勉強会を行った後、マイ避難カードづくりを実施

▶ 事前調査（まち歩き）

▶ 勉強会当日

事前調査で記録する説明スライド写真例

▶ 土砂災害のあった箇所

▶ 土砂災害のあった箇所

▶ 急傾斜地

▶土石流危険渓流

▶ 砂防ダム

▶ ため池

▶ 水位標

▶ 河川監視カメラ

▶ アンダーパス

▶ 溝蓋のない側溝

▶ 急な坂道

▶ 指定避難場所

3 防災マップづくり

まち歩きで得た情報をグループや全体で共有するため、防災マップづくりを行う

▶ まち歩きの結果を地図にまとめる。気づいたことや他の参加者に伝えたいことを話し合い、地図に書きこんでいく

防災マップづくりの流れ

1. まち歩きの結果をマップに記入する

▶ メモや写真を見返しながら、まち歩きで確認してきたポイントを白地図またはハザードマップ上にペンや付箋を使って書きこんでいく

▶ カラーマジックや付箋の色を使って、危険な場所と避難場所、水害と土砂災害などの分類をする。見やすくなるようにマップを仕上げていく

防災マップへの書き込み例（市町のハザードマップの色使いなども参考に）

浸水の危険性があるところ	土砂災害の危険性のあるところ	特に危険な箇所	注意が必要な箇所	防災に役立つ施設や設備など
青	茶	赤	黄	緑

▶ マップづくりをしながら、参加者同士で感じたことなどを話し合い、気づきを共有する

2. 防災マップを見ながら意見交換をする

▶ 防災マップを見ながら、グループ内で気になったことや考えたことを話し合う。話し合いで出た意見や気づきは付箋に書きこんで地図に貼るとよい

・地域内の危険な箇所、避難したほうが良いエリア
・避難場所と避難経路、避難の際に危険な箇所
・夜（暗いとき）や逃げ遅れたときに避難をする場所

▶ 緊急連絡網や避難行動要支援者の支援方法など、地域として取り組むべきことについても話し合う

3. 発表

▶ 防災マップをもとに、まち歩きと話し合いの結果を各グループが発表

▶ グループ同士で情報共有する

▶ 講師や支援者から発表に対する講評をしてもらう

ポイント！

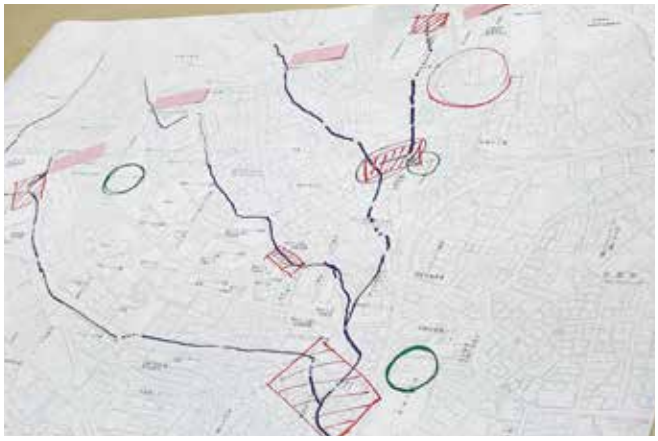
- 防災マップをつくること自体が目的ではなく、地域の危険性や避難について話し合い、参加者で気づきを共有することが大切
- 多くの参加者の意見を引き出すように話し合いの進行役（ファシリテーター）をおくことが有効

防災マップづくりで使用する主な物品

物品名	必要数	手配
防災マップ作成のための白地図 または 地域のハザードマップ（A0～A1サイズ）	グループ数	市町またはWEBサイト （詳しくは巻末の情報の入手先を参照）
ペン	人数分	運営者
カラーマジック（8色程度）	グループ数	運営者
付箋（2～3色）	グループ数	運営者

▶ 防災マップづくり（太子町）

▶ 防災マップづくり（佐用町）



▶ 作成した防災マップ（芦屋市）

▶ 作成した防災マップ（南あわじ市）

作成した防災マップの地域での活用

- ワークショップで作成したマップを1枚にまとめる。まとめたマップは、住民へ配布したり、地域の防災訓練で使用したり、公民館や小学校などで掲示するなど、さまざまな場面で活用できる
- 作成した防災マップを後日印刷して活用することを前提としている場合は、マップへの記載のルールを事前に決めておく

4 マイ避難カード作成

防災マップづくりを通して、地域の危険な箇所や避難場所などを共有した後、各自でマイ避難カードを作成する

▶ マイ避難カード作成の前に勉強会／後半を行う。避難を判断する情報の入手方法や避難のタイミングや避難行動の考え方を伝えることで、参加者が避難のルールをより深く検討できるようになる

ポイント！

● 活発な意見交換や円滑なワークショップ運営を進めるために、
各班に進行役として専門家や市町職員などに参加してもらうのが望ましい

マイ避難カード作成の流れ

1. カードへの記入

▶ まち歩きの結果を踏まえながら、勉強会／後半の内容をもとに、各自で避難の判断材料、避難のルール（いつ？／どこに？／どのように？）を検討し、マイ避難カードに記入する

▶ カードへの記入の際は、作成した防災マップや、ハザードマップ、マイ避難カードの作成方法や記入例を参照するとよい

2. 意見交換、質疑応答

▶ カードを作成する上で気になることを発言しやすい雰囲気づくりに努める

▶ 専門家や市町職員がいる場合は、カードを作成する上での疑問点に答えてもらうなど、サポートしてもらう

3. マイ避難カードの修正

▶ 意見交換や質疑応答を踏まえ、避難ルールを考えなおした人はカードを修正する

4. マイ避難カードの普及

▶ 最後に、ワークショップで学んだこと、考えたことを、参加者の家族や近所の人に普及してもらうように伝える。
勉強会配布資料やマイ避難カードを参加者に渡し、近隣に広げてもらうのもよい

▶ マイ避難カード作成（洲本市）

▶ マイ避難カード作成（神戸市）

ステップ 3 避難訓練

▶ マイ避難カードに記載した避難のタイミングや避難方法を確認するため、カードに基づく避難訓練を行う

ポイント！

- 避難訓練を実施して気づいた点があれば、マイ避難カードの記載内容を修正する
- 訓練を定期的に行い、避難のタイミングや行動を見直すことが大切

避難訓練の内容例

▶ 防災行政無線やひょうご防災ネットなどの情報ツールを用いて避難情報（訓練報）を発令

▶ 避難情報（訓練報）をきっかけにして、あらかじめマイ避難カードに記載している避難先への避難を開始

▶ ハザードマップや作成した防災マップ（配布版）も一緒に持ち出し、災害が想定されている区域や避難の際に危険な場所などを確認しながら移動する

▶ 実際に避難場所まで移動し、避難ルートや移動にかかる時間を各自点検する

▶ 避難のタイミングや避難経路など避難訓練で気づいた点は、マイ避難カードに反映する

地域で避難訓練を実施する場合

▶ 地域の防災訓練や防災学習会などとあわせて実施することも検討する

▶ 地域の情報伝達訓練や避難行動要支援者の避難訓練などとあわせて実施できれば効果的

▶ 訓練後には、参加者同士で意見交換を行い、振り返りを行う

個々での避難訓練

▶ 地域でマイ避難カードを使った避難訓練を実施するのが難しい場合は、各自でマイ避難カードを使い、実際を想定した持ち物や避難ルートなどの実地確認を行い、カードの修正をするとよい

▶ 避難訓練（太子町）

▶ 避難訓練（明石市）

ステップ 4 出水期の実践と検証

- ▶ マイ避難カードは作成して終わりではなく、ハザードマップとあわせて日常的に目にする場所に置いておく
- ▶ 災害のおそれがある時は、住民一人ひとりがマイ避難カードを積極的に活用していくことが重要

マイ避難カードの実践

- ▶ 台風接近などの情報が発信された場合には、マイ避難カードの記載内容をあらかじめ確認し、避難情報や気象情報に注意しながら、自らの避難行動を想定しておく
- ▶ 実際に避難行動をとる必要がある場合、マイ避難カードの記載内容に基づき、気象情報や屋外の状況などを考慮して避難する
- ▶ 災害が起きなかったとしても、避難行動が空振りだと思わずに、訓練（素振り）だと思って取り組む。機会がある度に、避難のタイミングを早めるなどマイ避難カードの見直しを行う

マイ避難カードの検証

- ▶ ワークショップ後、市町から避難情報が発令された際、どれだけの住民がマイ避難カードを活用して行動をとったかを、アンケートなどで検証する
- ▶ アンケートの結果から、地域の課題を洗いだし、今後の取り組みに活かす

共助の取り組みへ

- ▶ マイ避難カードの実践と検証を通じて、住民一人ひとりの行動だけでは解決できない避難に関する課題が明らかになることも考えられる。地域で解決できることには、市町などとも連携しながら積極的に取り組む

よくある質問

市町防災担当

マイ避難カード作成ワークショップを実施するにあたり、大学の先生にアドバイスや講義をしていただきたいと思っていますが、付き合いのある先生がいなくて困っています。

兵庫県防災担当

兵庫県の防災担当窓口にお問い合わせください。専門知識を持った先生をご紹介することができます。

自治会防災担当

私の自治会でもマイ避難カード作成に取り組んでみたいと思います。マイ避難カードの様式はどこで入手できますか?

兵庫県防災担当

マイ避難カードの様式は県のWEBサイトからダウンロードできます。ワークショップでの説明用資料などもダウンロードできるのでぜひ活用してください。

自治会防災担当

地域でマイ避難カードの取り組みを進めていきたいのですが、どのような人たちに声をかければよいですか?

兵庫県防災担当

自治会役員、自主防災組織メンバー、消防団などの方々を中心にワークショップなどの取り組みを始めてみてください。防災の専門家や地域の防災士などにアドバイザーとして関わってもらうのもよいでしょう。そこから、老人会、婦人会、PTAなどの地域各団体や小中学校、高校、社会福祉協議会、福祉施設など、取り組みの輪を広げましょう。

自治会防災担当

マイ避難カード作成のために必要な資料の印刷代や講義をお願いする先生の費用への支援はありますか?

兵庫県防災担当

取組方法や内容によって、さまざまな支援メニューが設けられています。県市町へ相談するか、P.33の支援メニューをご覧ください。

講座、ワークショップ、訓練などの支援事業

ひょうご安全の日推進事業

「実践活動事業」
マイ避難カード作成など防災減災の取り組みを対象に、地域団体などに対して経費を助成

対象者 …… 地域団体（自主防災組織、自治会など）、学生グループ、学校、企業・事務所
対象事業 …… マイ避難カード作成にかかるワークショップ、避難訓練など
助成金額 …… 2万円以上の助成対象経費に対して、概ね1/2の額（最大30万円）
助成対象経費 …… 謝金、旅費、会場借上料、消耗品等購入経費、印刷製本費など

問い合わせ …… ひょうご安全の日推進県民会議事務局 兵庫県復興支援課（TEL 078-362-9984）

ひょうご防災特別推進員

ワークショップや防災訓練などに推進員を派遣

対象者 …… 自主防災組織、自治会、学校、企業その他各種団体
対象事業 …… 防災ワークショップ、防災訓練、自主防災組織活性化の取り組みなど（原則10名以上が参加）
派遣時間 …… 1回の派遣につき3時間以内
派遣費用 …… 無料（謝金、旅費）

問い合わせ …… ひょうご安全の日推進県民会議事務局 兵庫県消防課（TEL 078-362-9819）

出前講座（防災編）

防災講座や演習などに市町職員などを派遣

対象者 …… 当該市町内に居住・勤務・在学する、約10人以上が参加する団体やグループ
講座内容 …… 市町防災の取り組み、災害への備え、防災演習など
派遣時間 …… 1回の派遣につき、約30分～1時間30分程度
派遣費用 …… 原則無料（謝金、旅費）

問い合わせ …… 各市町防災担当課（各問い合わせ先はP.53を参照）